

第2学年 国語科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「ことばについて考えよう」 教材名「ようすをあらわすことば」

2 単元の目標

身近な音や動き、様子を表す語句を増やし、文の中で使える。語と語の続き方に気を付け、様子が分かるように自分の文を書き表せる。言葉の働きを確かめ、友達との交流を基に自分の学習を見直そうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①身近な音や動き、様子を表す語句を増やし、文の中で使っている。 (〔知識及び技能〕(1)オ)	①「書くこと」において、語と語の続き方に気を付け、様子が分かるように自分の文を書き表している。 (B(1)ウ)	①学習の見通しをもち、単元で確かめたいことに進んで取り組み、友達の言葉や自分の記録を基に、読み方・表し方を見直そうとしている。

4 指導上の考察

(1) 単元について

音や動き、感じを表す言葉を集めて、身近な出来事を詳しく書く。擬音語や擬態語を文に飾りとして足す前に、どの様子を伝えたいのかと結び付けて選ぶ。学習指導要領のB(1)ウを中心に据える。関連する知識・技能として〔知識及び技能〕(1)オを、言語活動の中で確かめる。年間計画の重点項目に加え、本案ではB(1)ウを活動に関わる事項として扱う。

(2) 児童について

(学級の子どもの様子を先生が書く)

(3) 指導について

教師の動作や身近な音を言葉にして比べる。誰が何をした文を先に確かめ、様子の言葉をどこに入れるか声に出して試す。音が聞こえにくい児童には動きや視覚の例も用意する。おおむね満足できる状況は、語と語の続き方に気を付け、様子が分かるように自分の文を書き表しているという姿で捉える。語句や本文を示さず結論だけ述べる場合は、根拠を確かめる支援を行う。発言の回数や記述の長さでは判定しない。

5 指導と評価の計画（全4時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1	○身近な動きや音を表す言葉を集め、表す様子の違いを話す。	学習状況を見て支援する。
第2次	2	○自分の経験を選び、様子の言葉を入れた短い文を書く。	知①（語句や内容の整理）
	3 （本 時）	○文を読み合い、友達が思い浮かべた様子を聞いて言葉を選び直す。	思①（発言・学習記録）
第3次	4	○文カードを仕上げ、様子の言葉を加えて伝わるようになったことを話す。	態①（学習前後の記録・振り返り）



6 本時の指導 (3/4)

(1) 本時の目標

語と語の続き方に気を付け、様子が分かるように自分の文を書き表せる。

(2) 学習過程

段階	学習活動 (○主な発問) ・予想される児童の反応	指導上の留意点 (◎評価)
導入 (分)	本時に使う教材・前時までのノートを確認、自分の最初の考えを短く書く。 ○「この言葉を入れると、どんな動きや音が伝わりますか。自分が伝えたい様子が合っていますか」 【めあて】音や動き、感じを表す言葉を集めて、身近な出来事を詳しく書く。 〈予想される児童の反応〉 ・ゆっくりした動きと急いだ動きでは言葉が異なる。	本時に考える対象を確認し、既に確かめたことと、今日確かめたいことを分ける。児童の最初の言い方を残し、まとめて比べられるようにする。
展開 (分)	○「この言葉を入れると、どんな動きや音が伝わりますか。自分が伝えたい様子が合っていますか」 自分が見た音や動きを思い出し、様子を表す語句を選んで文を書く。友達に読んでもらい、どんな様子が伝わったか聞く。語と語の続き方を声に出して確かめ、伝えなかった様子が合う文へ直す。 〈予想される児童の反応〉 ・ゆっくりした動きと急いだ動きでは言葉が異なる。 ・同じ雨でも音の感じが異なる。 ・言葉を入れる場所を変えると、何の様子が分かりにくくなる。	教師の動作や身近な音を言葉にして比べる。誰が何をした文を先に確かめ、様子の言葉をどこに入れるか声に出して試す。音が聞こえにくい児童には動きや視覚の例も用意する。 想定する難しさ：思い付いた音の言葉の意味を考えずに並べる。何の様子が伝わらない文になる。 児童の考えを教師の想定した言い方にそろえない。理由が確かめられる考えは残し、根拠が異なるときはその違いを板書する。 ◎思① 語と語の続き方に気を付け、様子が分かるように自分の文を書き表している。(様子を表す文・読み返して直した箇所)
まとめ (分)	【まとめ】今日確かめた言葉や表現と、それによって確かめたことを対応させて自分の言葉でまとめる。 学習前の考えと比べ、付け加えたこと、残したこと、その理由を記す。 〈予想される児童の反応〉 ・友達の考えを聞いて、自分の理由を詳しく説明できた。 ・言葉を入れる場所を変えると、何の様子が分かりにくくなる。	まとめの文を先に与えて写させず、児童が本時に扱った実際の言葉を入れる。書くことが難しい場合は口述を記録する。次の学習では、その記録を使って自分の表し方を確かめる。 ◎態① (学習前後の記録と、見直した理由)

(3) 板書計画（縦書き・右から左へ）

右端に題名と本時のめあて。その左に問い「この言葉を入れると、どんな動きや音が伝わりますか。自分が伝えたい様子に合っていますか」。中央は根拠となる言葉・本文の箇所と、そこから考えたことを上下に対応させる。根拠の本文は先生が教科書から書き入れる。中央から左に児童の考えを並べ、同じところを囲み、違いの理由を線で結ぶ。左端に、本時で確かめた実際の言葉を含むまとめと、考えを見直した理由を書く欄を置く。縦書きで右から左へ学習の順をたどれるようにする。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

